

エルサレムの神殿に就て

山崎 亨

一

古よりエルサレム神殿の聖所には不滅の燈火が燃え續けてゐた。列王記上一・三六の邦譯聖書にては「……我……わが僕ダビデをして……我がために撰みたる城エルサレムにてわが前に常に一つの光明を有たしめん」とあるが、之は正確に譯すれば「わが僕ダビデのために……何時迄も一つの燈火(Or)有るべし」となる。詩篇一三二・一七、一八も「われダビデの爲に彼處に一つの角生えしめ、わが受膏者の爲には燈火を備へたり。我彼の仇に恥を衣せれど、彼には其王冠輝かしめん」(試譯)とあつて黄金の王冠が燈火に輝く様を目に髣髴せしめる。又レビ記二四・一と出埃及記二七・二〇(P)に於ては、神はモーゼに命じて「エホバの前にて純精の燈臺の上にその燈火絶えず整ふべきなり」と。後者は燈火の起原を祭司流にモーゼと結び付けてゐるに對し、前者二箇處は起原をダビデに結びつけてゐる。併し歴史的に此神殿の燈火がソロモンやダビデに起原するとは考へられないのである。

二

エルサレムの神殿に就て

エルサレムの神殿に就て

抑々寺院はダビデの發意に依るとされてゐるが（サムエル下七、歷代上二二）實際に建てたのはソロモンであり、聖書は其完成の年を着手（登位四年）より七年目（列王記上六・）となすのと、二十年目（歷代史下八・）と記すものと二つの記録を遺してゐる。此年代を何れの一つに決定するかは鍵はソロモンの神殿獻堂の辭に存する。列王上八・一二、一三が之であつて、之を七十人譯を参照してマソラ原典に訂正を加へると左の如くに譯せられる。

ヤハウエは太陽を空に置き給ふ、

濃き黒闇の中に入り給ふ者斯く告ぐ。

『吾爲に、我に相當しき舍を設けよ。』

我は其處に永遠に住まん』

「濃き黒闇の中に入る」は日蝕を指すのであつて、天文學の記録に據れば九四八年五月廿二日に日蝕が起つた事を明記してゐる故、歷代志略に従つて登位後四年即ち九六六年より二十年後、九四六年は比較的日蝕の記録と近き日なる故、歷代志略を正しいとする。ソロモンが神殿建設の大なる願をなしたのは日蝕が大なる災害の來るを前兆すると見て、夫れを免るゝ爲であると見られるのである。此處にエルサレム神殿と太陽との關係が考へられるのである。

偕ソロモンの建てし神殿の構造はエジプト、バビロニアに於ける太陽神の神殿と類似する點が多く、エジプトに於ても他の神殿とは然らずとするも太陽神を祀る社とは全く類似するのである。例へばラムセス三世の建立せしカルナツクのアムモン神殿（約一一八〇年）を見るに、³⁾神殿の矩形なる點、東面してゐる事、且内部は三つに分たれて居る點（即ち東より門を潜れば〔一〕外庭、〔二〕前房、〔三〕聖所あり、エルサレムの神殿は東より入り〔一〕前房、〔二〕

聖所、(三)至聖所の順序)等に於てエルサレム神殿と共通する。バビロニアの寺院との比較に於て興味あるは社の樞軸が何處と結びついて居るかの點である。メーレンブリックに依れば、エサギル碑文に次の如き言葉が彫られてゐると。「タンムツの月(七、八月)の十一日にエサギル(マルドック神の社)の娘即ちミウスサル(女神)とカトウナ(女神)はエジダ(ネボ神の社)に行き、テベト(十二月、一月)の第三日にはエジダ(ネボ神殿)の娘ガザバ(女神)とカニスラ(女神)はエサギルに行く也。そはタンムツの月は夜短く、之を長くせん爲にエサギルの娘エジダに行く。エジダは夜の社なればなり。テベトの月は晝短かければエジダの娘はエサギルに赴く。そは晝を長くせんとてなり、エサギルは晝の社なればなり」と。此の碑文に依つて知り得る事は、エサギル即ちマルドックの神殿は何らかの意味に於てタンムツの月即ち七、八月の夏に關し、エジダ即ちネボの神殿はテベト即ち我等の十二月、一月なる冬に關係する事である。諸マルドック神殿が夏の太陽に關與してゐる事は其建築物の樞軸に依つて實證せられるのである。神殿の聖所に在る神體と祭壇を結ぶ線を更に東に延ばし山と結び付く其地點は、實に神殿より見る時、夏至の日に太陽の昇り来る點である。即ち夏至の日に太陽なるマルドックは地上に於ける最初の光を神殿の奥深くまで投げる事が出来、聖所の前に立つて正門を向くならば太陽は正門を通じて直射し来るのである。更にネボ神殿に於て此の軸は冬至に太陽の昇る點へと結び付いてゐるのであつて之は偶然とすべきでなく此處に神殿を建つる意圖のあつた事を思はしめる。翻つてエルサレム神殿を見るにヘロデの建てた神殿に依れば至聖所、聖所、青銅の壇を結ぶ線は上の門、ニカルノの門即ち美麗門に結ばれ、此門はヨセフスに依れば他の門より大きく作られて居た。⁵⁾此點よりしてソロモンの時代にも此處を正門としてゐたと推測し得る。併して此の門を更に延長するならばオリブ山の頂に續くのである。

エルサレムの神殿に就て

エルサレムの神殿に就て

後期ユダヤ教文献の一なる *Sukkah* 五^三に「吾等の祖先は、神殿に脊を向け東に面して太陽を崇めたれど我等はエホバに屬する者にして、吾等が目はエホバにぞ向けらるゝ」と書かれてゐるが、其昔東面して太陽を、恐くはオリブ山より昇る太陽を崇拜した事であらう。舊約聖書に溯ればソロモンが神殿を完成した後エホバの契約の箱は至聖所に納められたのであるが(列王上八^{一七})それはエタニムの月即ちイスラエル暦の第七月(十月―十一月)頃に行はるゝ節筵(秋分に行はるゝ祭)の日が特に選ばれたのである。偕此の秋分の日太陽の位置を考ふるに、神殿至聖所より東を見れば旭日はオリブ山の頂に昇る筈である。

何故にソロモンの建てたエルサレムの神殿が斯く太陽を崇拜するに適しき様に設られたのであらうか。之には色々と憶測を逞しうしなければならぬ程資料に乏しい事を感ずるのだが、先づエルサレムの歴史を回顧する必要がある。ヨシユア記一八^一以下に依れば、ヒブル諸族がパレスチナに移住し來りし時エルサレムはベニヤミン族の所有に歸したのである。然るに創世紀三五^{一八}に従へばベニヤミンとは後に變更したる名前、原始はベノニ(Ben-ôn)と稱された。此名をヒブル的に「吾苦痛の子」と解してラケルの物語が附加せられてゐるけれども之は説明的物語に過ぎず、寧ろベン・オニの名の含むオンより「オンの子」とせられるのではないだらうか。此ベニヤミン族が占めた(ヨシユア一八^{二三})地域の北西の境に近くベテルの町あり。其東にベテアベンなる村があつた(ヨシユア七^三、ホゼア四^{一二})にてホゼアは「邪惡の家」なる語義を取つてベテルを指して稱んだらしむ。此ベテアベン(Beth-aven)はギリシヤ譯聖書B寫本には(ヨシユア一八^{一二}) *Bethan* となつてゐて此處にもオンが現は來る。「オン」はエジプトの市の名前である。之をギリシヤ人は「ヘリオポリス」(「太陽の町」と稱んだ如く、實にオンはアメンホテプ四世を除く

各歴代王の治世中は、他に類無き程盛なる太陽神崇拜の中心都市であつた。此オンを名を一部とする種族が、エヂプトより來りし時太陽神崇拜の神殿を其占領區域に作つた事は容易に想像せらるゝ處である。ベイス・オン（オンの家又は宮）も其一部か。ソロモンの神殿は斯る影響を受けたのであらうと思はれる。

三

再び聖所に燃ゆる不滅の燈火に言及するが、舊約聖書に於ては如何にして最初點火されたかに就いて明記されず、唯神が備へ給ふたと信ぜられてゐた。第二マツカビー書一・九・三六に據れば「我等の祖先ベルシャの土地に移されんとせし時」に祭司は祭壇の火を取りて乾きたる井戸の中に入れ置き、ネヘミヤの時、俘囚より歸還するやエルサレムに再び此燈火を點ぜんとして祭司に火を持ち來らん事を求めた。祭司は彼の井戸に行きしに火は既に無く、水の入り増し加はりて居り、ネヘミヤは其水を汲みて、祭壇に捧げられたる犠牲と薪に降り掛くやう命ず。祭司の斯く爲したる時、太陽の光照り入りて、俄に火は點ぜられたりと。燈火は太陽によりて點ぜられたのであつて、燈火は太陽の光の表象であつたのであらうか。

サムエル後書二一・二セに依れば、「是に於て從者彼（ダビデ）に誓ひて曰ひけるは、汝は再び我等と共に戦争に出づべからず、恐らくはイスラエルの燈火（*ner*）を消さん」とある。之はダビデ王の生命がイスラエルの燈火即ちエルサレム神殿の燈火であると言ふ。斯る表現は、ダビデ王及其の後裔なるダビデ朝の王が國民生活の中心と考へられてゐた事を立證する。民族の財産、其の傳統其他總べてを包含したるもの——ピーダーセンが名付けた如く“*Psychic*

エルサレムの神殿に就て

エルサレムの神殿に就て

whole⁽⁶⁾——の要をなす者即ち“corporate personality”⁽⁷⁾として王が崇められたのである。併して王は神ヤハウエの子とされてゐるのであつて、サムエル後七・二四「我(ヤハウエ)は彼(ダビデ)の父となり、彼はわが子となるべし、」と更に詩篇八六・二六、二七にも同様である。然るに又他面神ヤハウエも王座に着き王と崇められる。詩篇一〇・二六に「ヤハウエは永遠に王なり」、又二九・一〇は「ヤハウエは寶座に坐して、永遠に王なり」と讃へる。併してエルサレムは「大いなる王(ヤハウエ)の都なり」(詩四八・三)とされる。斯く神ヤハウエが王座に着く事は單に神を讃へ其威力を序述するための繪畫的場面の展開でなしに、實際に儀式として行事として實行されたものゝ如くである。詩篇四七・五、八「神は喜び叫ぶ聲と共に登り、ヤハウエはラツパの聲と共に登り給へり。……神は其聖き寶座に坐り給ふ」と詩九八五、六「琴を以てヤハウエを讃め歌へ。琴の音と歌の聲とを以てせよ。ラツパと角笛を吹き鳴らし王ヤハウエの御前に慶ばしき聲を上げよ。」之は想像的描寫と言ふべく餘りに現實的であり、行列とそれに伴ふラツパ角笛、歌聲等は儀式を實際に序述するものゝ如くである。此の儀式が行はれたとしたならば如何なる場合に爲されたであらうか。バビロニア、エジプト等の祭禮と比較して考ふる時、結茅節(Sukkoth)の第一日に行はれたと思はるゝ新年祭に於て爲されたものであらう。新年に土地が再び新らしく造られる事、再び大地の生産の業が始めより繰返さるゝ事を祈るために、天地創造の神話が祝詞として唱へられたのであらう。神が王座に登る儀式は、神が悪に勝ちし後に創造者、審判者としての位置に着く事であり實際に儀式としては王自らが神ヤハウエとして、エルサレム神殿内に設けられた王座に登るのではあるまいか。夫れはともあれ、此の行列がエルサレム神殿の門に入る時を序述するものとして詩篇二十四を讀む事が出来る。

地はヤハウエのもの也、それに充つるもの、世界と其中に住む者も彼のものなり。

ヤハウエは地の基を大海の上に据え、大川の上に之を定め給へり。

此の一節、二節は天地創造物語の復唱である（前述の如く結茅節の節筵に於て創造物語が繰返さるゝを思ひ合すれば意義深い）。之に續く三―六節はヤハウエを拜する者の如何なる人たるべきかを條件付ける。恐らくは神殿に参拜せんとてシオンの山に登り來る時、参拜者は暫し歩みを止められ、祭司の一人甲は左の一節を唱するのであらう。

「わが主の⁸⁾山に登り來る者は誰ぞ、その聖所に立つべき者は誰ぞ」（第三節）
すると乙なる祭司は答へて曰く

「手清く、心潔よき者。其靈虚榮を仰ぎのぞまず、偽りの誓をせざる者ぞその人なる」（四節）

甲の祭司は再び口を開き告げて曰く

「斯る人はヤハウエより福祉を、助けの神より繁榮を受けん」（五節）

斯くて参拜者が門の外に待つうちに王を中心とする行列來たり、其の中なるレビの聖歌隊は左の如く歌ふ

「門よ汝の首をあげよ。古の戸よあがれ。榮光の王入り給はん」（七節）

門の傍なる祭司の一人は問ひつゝ歌ふ。

「榮光の王は誰なるか」

レビの聖歌隊は

「力を持ち給ふ猛きわが主なり、戦ひに猛けきわが主なり」

エルサレムの神殿に就て

エルサレムの神殿に就て

更に之を繰返して、門は開けられて、行列は神殿の中に入るのである。⁹⁾ 斯く問答の交はさるゝはエルサレム神殿の門に行はれてゐた事である。¹⁰⁾

(註) 1 七十人譯では十二、十三節は五十三節と五十四節の間に入つて居る。

2 Eissfeldt in Bartholet: Die heilige Schrift des alten Testament, i, 1922, p. 513.

3 カルナツタには第十一王朝(一一六〇—一一〇〇)頃からナムモン神を祀る神殿は計畫され、建築されたのである特にラメセス三世(第二十王朝)の夫れは今日も尙明かに壯麗なりし神殿の遺跡を見る事が出来る。

4 Kurt Möhlenbrink, Der Tempel Salomos, eine Untersuchung seiner Stellung in der Sakralarchitektur des alten Orients, 1932, pp. 79 ff.

5 Josephus, Bell. Jud., V. 204.

6 J. Pedersen, Israel; its Life and Culture, 1926, p. 475.

7 Wheeler Robinson's article "Hebrew Psychology" in The People and the Book ed. by A. S. Peake, 1925, pp. 375 ff.

8 ヤハウエなる神の名を口にするを畏れでヒブール人はアドーナイ(わが王)と稱した事は既に人々の知る事實である。詩篇二十四篇に就ては Oesterley, The Psalms, vol. I, 1939 を参照した。

10 Hollis, The Archaeology of Herod's Temple, 1934.